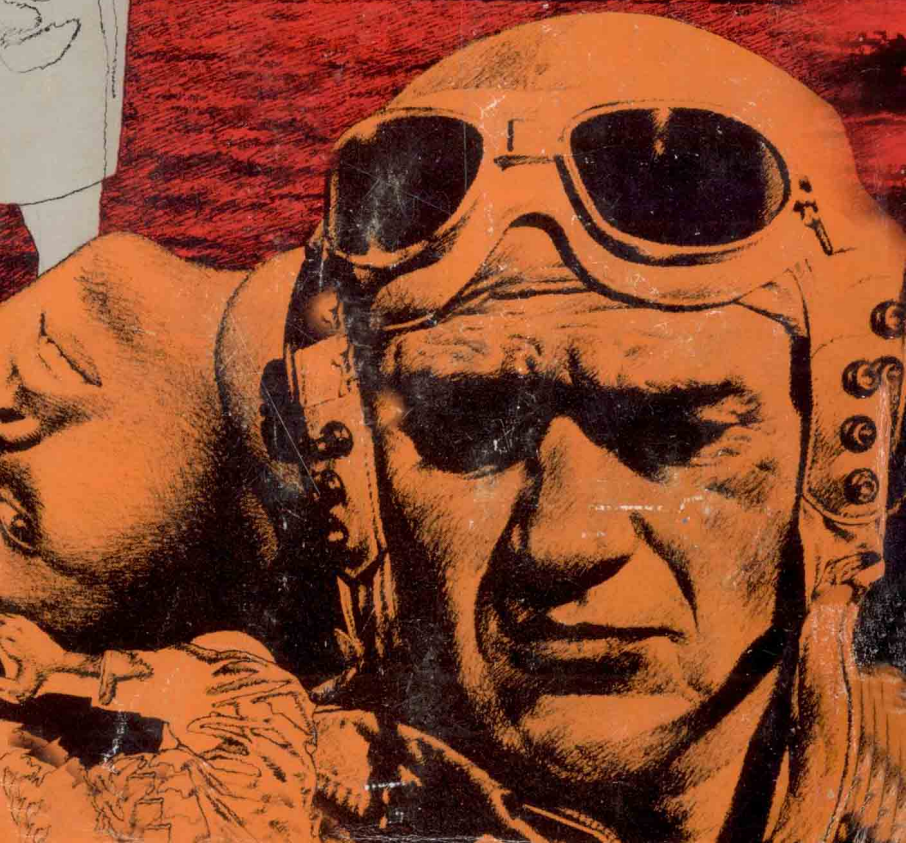


火の十字架

森村誠一

+



火の十字架



角川書店



火の十字架

森村誠一

昭和五十五年一月八日 初版発行

発行者 角川春樹

発行所 角川書店

東京都千代田区富士見二―十三
〈電〉〇三△二六五△七一― 大代表
〈振〉東京三―一九五△〇八△郵△一〇二―

印刷・製本 大日本印刷株式会社

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0093-872268-0946(0)

目次

設立された死	七
逆転の海戦	六
鬼の情け	五〇
誤射した十字架	六〇
殺人会社	四
強殺の合鍵	六七
老兵の感傷	二六
中間現場	一三
幻の恋人	一四二
奇胎の戦後	一六
切り離された現場	一七
帰り車の客	二〇三

被害者の“遺詩”	三〇
二重の遺族	二四
心酔した共通項	二六
殺人の環	二七
共犯の写角	二九
酷似した因縁	三二
牽引された帰途	三九
駐車した決め手	三六
不帰の航続	四九
あとがき	三七

イラストレーション

デザイン

日暮修一
鈴木邦治

火の十字架

設立された死

1

綾瀬^{あやせ}勝治^{しょうじ}の視野に、竹間^{ちくま}政道^{まさみち}は、いつのころからかチラチラするようになった。それも「目障り」な現われ方ではなく、いつの間にか見なれた風景として視野の中にジグソーパズルのようにピタリと納まった感じであった。

最初に口をきいたのは、行きつけの立飲み屋で隣り合ったときである。それもいましておもえば偶然ではなく、竹間が意識して隣りへ来たようである。

いつもリユウとした皮ジャンパーに乗馬ズボン、真新しい地下足袋^{たび}を穿^はいている。懷^なろも暖かいらしく、トンカツや魚の刺身にキンシ正宗^{やんせいかう}（一級）をつける。時にはウイスキーグラスをおつとりと傾けていることもある。ラーメンライスや焼酎^{やんカウ}には目もくれない。

このあたりで尊敬されている鳶職^{とびしよく}だろうと綾瀬は男の身許^{みもと}におおかたの見当をつけた。それも高いビルやタワーの建設現場で働く「高所トビ」にちがいない。

高い所に上って、大工、左官、鉄骨、ブロック屋などが働けるように足場を組み、仕事の段取りをつけるトビは、命がけの危険な職である。それだけに土方や穴掘^{なぐり}にはない独特の風格とプライドをもっている。賃金^{デツラ}も他の職人より格段によい。

無技能の單純肉体労働者が圧倒的に多いこの界限かいわいで熟練したトビはエリートである。

年齢は三十を少し出たか出ないかというところ、いかにも高所で身体を張っているような男っぽい風ふう貌がうと引きしまった体軀たいくの持ち主である。

綾瀬がコップ酒の「半がわり」を未練がましくチビリチビリ舐なめていると、キンシ正宗の大銚子（二合入り）を景氣よく彼の前に差し出して、

「おやじさん、よかったらこれを飲やりなよ」

と勧めてくれた。半がわりのおかわりをしようかしまいか躊躇ためらっていた綾瀬は、びっくりして相手の顔を見た。景氣のよさそうな客を見つけてはたかろうという手合いばかりが多い中で、先方から奢ぜつてくれるとは奇特な人間がいたものである。

それが竹間政道との出偶であいであつたようである。

「よかつたら、いくらでも注文するからよ。どんどん飲やつてくれ」

竹間は言つた。

「兄さん、景氣がよさそうだね」

綾瀬は、残り少ない自分のコップ酒と比べて、さもしく笑つた。相手がなぜ自分に奢ろうとするのか、そんな理由など考えない。二合のキンシ正宗にありつけさえすれば理由などどうでもいいのだ。

理由なく人から奢られるのを氣にするようであれば、半がわりなど注文しない。酒の半がわりは、この界限独特の注文法で、コップに半分酒を注いで値段も半分になる。半がわり二つで一合に相当するわけだが、二回に分けることによって少し注ぎすぎがあり、同じ値段でちよつぱり余分に酒が飲めるといふ算段から発したさもしい注文法である。また一合分の金すらもっていないこの土地柄を現わしていた。これをさもしいとおもうような人間は、この土地にいられない。

「金は天下のまわりものだからね。今夜は少し懷中が暖かいんだよ。半がわりなんぞ舐めてないで景気よく空けなよ」

竹間は齒切れのよい口調で勧めた。これを機縁にして、二人はよく出遇うようになり、遇えば必ず竹間がなにがしかの酒食を綾瀬に奢ってくれた。栄養不足と苛酷な労働で、実際の年齢よりも老いの進んだ身体は、仕事にアブレる日が多い。もう若いころのように無理がきかず、ドヤ代にもこと欠くようなときに、竹間はまさに救いの神であつた。

落ちぶれたみじめさを麻痺させるために恩給を全部飲んで、それでも足りずに、ついには血まで血液銀行に売って飲むことがある。そんなとき竹間は、「体さえしつかりしていれば、ここから脱け出せる。無茶しちゃいけないよ」とカツ丼や天丼をご馳走してくれて、なにがしかのドヤ代まで恵んでくれた。

「いつもすまねえな」

綾瀬は、竹間に感謝し、しだいに彼に心を開くようになった。

この街は社会の吹きだまりであり、人間のごみ捨て場である。前科、前歴を引きずっている者、警察から追われている人間、倒産して夜逃げをして来た一家、失業者、脱サラ失敗者、出稼ぎに来たまま郷里に帰らない者など、いずれも暗い過去の影を背負った人間たちが、もはやこれ以下に落ちようのない最底辺として流れ込んで来る場所である。ここでは過去の話をするのも訊くのもタブーになっている。この街に落ちて来た人間にとって過去は触れられないくない恥部であつた。

それにもかかわらず、綾瀬は、竹間に心を開き、身上をポツリポツリと話すようになった。

「おやじさん、あんたも苦労したんだねえ」

竹間は、綾瀬のかなり都合よく脚色された身上話を親身になって聞いてくれて、

「しかし人間七転び八起きだ。これからきつといいことがあるさ」と新しい酒を注いだ。

「もうだめだよ。おれは人生の敗残者だ。もう少し若ければ立ち直れたかもしれないが、そんな根気はないね」

「弱気になっちゃいけないよ。実はね、あんたさえやる気があれば、一ついい口があるんだがな」

竹間は、ちよつと声をひそめるようにして言った。

「危い話には、乗らないよ」

竹間の口調から、綾瀬はやや警戒の構えをとった。アブレた労働者を言葉巧みにそのかして、強盗の片棒をかつがせた実例が最近あった。酒食を奢られたくらいでそんな剣呑な片棒をかつがされてはたまらない。

「危い話じゃないよ。実はね、おれの知合いが会社を設立したがっているんだが、発起人の人数が足りなくて困っているんだ」

「発起人の人数だつて？」

「株式会社を設立するには、七人以上の発起人を要することが、法律で定められている。その人数が一人足りなくて、せつかく設立直前まで漕ぎつけていながら足踏みをしているんだ」

「その発起人になれと言うのかい」

「そうだ。もちろん只とは言わない。それ相応の謝礼もする、あんたにその気があるなら名目だけでなく、実際に経営に参加してもらいたいとおもっている」

「おれが会社の経営に参加？ 冗談じゃないよ」

「いや、本気だよ。我々も曲がりなりにも一つの会社を経営しようとしているんだ。だれでもいいというわけにはいかない。あなたはいまは時と所を得ずにこんな所にくすぶっているが、決してこのまま終るような人じゃない。過去の経歴も立派なものだ。どうだい、我々とともにもう一旗あげてみるつも

りはないかね。今度の会社はしっかりした資本家も付いていて、資金はたっぷりある。いいおもしろいがで
きるぜ」

「なんだか突然言われたものだからなあ」

綾瀬は竹間の話にかなりの色気を見せた。

「あなたしでいで決まるんだよ。あなたほどの器量のある人なら、それをもう一度社会のために役立
てるべきだとおもうよ。まああなたがどうしても気が進まないと言うなら、他にも心当たりがないわけ
じゃないから、そちらを当たってみるがね、これほどのチャンスはこれから二度とないだろうなあ」

竹間は「あんた」と「あなた」を使い分けながら緩急自在に綾瀬を誘った。

「だれも気が進まないなんて言っていないよ。それで実際にどうすればいいんだね」

綾瀬は引かれた糸に慌てて飛びついた。現在の境遇から逃げられるのであれば、どんなことでも
やれる。竹間のたれた糸の先にはいかにも美味そうな餌がぶら下がっていた。そこにどんな鉤が仕掛け
られているか、いまは考える余裕がない。ただ一つわかっていることは、その餌に自分が食いつかなけ
れば、他の者に食われてしまうということである。

「それじゃあ引き受けてくれるんだね。やっぱり綾瀬さんだ。私が見込んだだけのことはある。チャ
ンスを逃さない」

竹間は、すかさずおだてあげて、

「とりあえず必要な書類は発行株式証書や株式引受証や、取締役の就任承諾書などだが、これはこち
らで用意できる。まあ発起人として何度か会社の方に顔を出してもらうことになるかもしれない」

「どうせ閑な身体だからね、必要があれば何度でも顔を出すよ。ところで取締役の就任承諾書という
と、このおれが取締役になるのかね」

「いやかね」

「いやだなんて、とんでもない！」

「それじゃこれで決まった。あなたは我々の共同経営者だ。わが社の発展と繁栄のために乾杯だ」
竹間は、また新たにキンシ正宗を注文した。

翌日竹間は、設立予定の新会社の事務所に綾瀬を連れて行った。「新社」は、新橋駅に近いぐみぐみした一角の貸ビルの中にあつたが、ビルは割合小ざれいで、十五坪ほどの事務所の中には真新しいデスクやロッカーが一揃い並べられてある。

「ここが設立準備事務所だ。設立後は、銀座に「本社」を置いて大規模に営業をはじめ。それまで狭いがここで辛抱してもらいたい」

と竹間は言ったが、これまで東京の吹きだまりで、宿にも満足に泊まれなかつた身には諸事新品でかためである事務所が眩しく見えた。ここで綾瀬は、武田、友部、松原という他の三人の仲間に紹介された。いずれも発起人で、新社の共同経営者になるということである。あとの二名の発起人は社員の名前を借りているようである。新社の名前は「五恵商事」で、主として、繊維製品と雑貨を取り扱うという。竹間の仲間は、非常に友好的に綾瀬を迎えてくれた。酒と仕出しの食べ物を取り寄せて、五人で酒宴がはじめられた。宴と呼ぶにはまことに殺風景なものだったが、立飲み屋で合成酒の半がわりを舐めていた舌には、久しぶりすぎておもしろいのだすのに時間がかかる味ばかりであつた。

アルコールが回るほどに五人は打ち解けてきた。

「この五人の中で、綾瀬はんがいちばん年輩やし、人生経験も豊かやさかい、いつそのこと綾瀬はん社長になつてもよろうたらどや」

と友部が言いだした。この男が四人の中では最も調子がいい。

「それはいい。わしは賛成だな」

武田が言下に応じた。

「竹間はんと松原はんはどうやね」

友部は残りの二人の方に目を向けた。

「綾瀬さんはおれが連れて来た人だからね、綾瀬さんさえ異存がなければ、こんな願ったり叶^{かな}ったりはないがね、だけどいきなり社長なんて頼み難かったからね」

「松原はんはどうや」

「社長はだれかがやらなければならない。年功や人生経験からいっても、綾瀬さんが、いちばんふさわしいだろう」

「ほな、みんなの意見が一致したわけや。綾瀬はん、おねがいしまっさ」

「ちよつ、ちよつと待ってください。いくらなんでもいきなり社長なんて。そんな経験はないし、私には仕事のことなんかなにもわからない」

「仕事なら、我々にまかしてください。綾瀬はんにはいてもらうだけでええのや。社長は会社のシンボルやさかいに、なにもせんとデンと構えてはるだけでええのんや。綾瀬はんなら押出しもええし、人が信用しまっさ」

「綾瀬さん、みんなもああ言ってる。ここはすんなりと社長を引き受けてもらえないかな。社長に見合うだけのことはしますよ」

竹間が傍から口を添えた。

「本当にいるだけでいいんだね」

「それが社長の仕事です」

竹間の言葉遣いも変つてきていた。結局みなから押し上げられて、綾瀬は社長に就任することになった。悪い気はしなかった。あまりにも話がうますぎるような気もしたが、落ちるだけ落ちた身は、もはや失うべきものをもっていないから、自衛の算段をする必要がない。せつかくのよい話を疑うことによつてご破算にたくない。

「社長がこれまでのようにドヤに住むわけにはいかないなあ」
竹間が案じた。

「どうせ事務所が空いてるのやから、当分の間ここに寝泊まりしてもらたらどや」
友部が提案した。

「そいつはいい考えだ。ここならドヤよりは多少ましだろう。設立したら、赤坂あたりのパンとしたマンションに社長専用室を用意しますから、それまでここがまんしてください」

ということになって、綾瀬は事務所に寝泊まりすることになった。綾瀬の参加によつて設立手続きは順調に進められ、設立登記も無事に完了した。ここに「五恵商事」は成立したようである。「ようである」というのは、綾瀬はいつさい設立事務にタッチせず、すべて竹間から聞いたことであるからだ。

設立登記がすんでも、会社はいつこうに営業らしい営業をしなかった。武田、友部、松原の三人も、時折、姿を見せるだけで、なにをしているのかまったくわからない。竹間だけが一日に一回、現われるが、それも三十分も事務所にいない。電話は引いてあつたが、ほとんどベルが鳴つたことがない。たまに鳴つても仲間からであつた。

綾瀬は食べ物と酒を十分にあてがわれ、一日中ぶらぶらしているだけでよかった。時々竹間が、キャバレーに連れて行つてくれた。社長の「交際費」と称して、小遣いもくれた。彼の話によると、社業は